マルキオンにおける創造と悪

――テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』をテキストとして――

津田謙治

序

具体的な詳細や、自身の著作が残されないまま消えていった思想家たちは、一方では忘れ去られ、他方では美化されることが往々にしてある。ハルナックが生涯をかけて綴ったマルキオンのモノグラフ[1]は、その形態こそ客観的な研究として捉えられているが、その中身はハルナック自身の思念が重要な事柄を占有し、そこから生まれたマルキオン像は、多様なレッテルと共にその輪郭を不鮮明なものとしている。パウロ主義者、グノーシス[2]、非グノーシス、反哲学者……。これらは少なからずハルナックが無意識にかけた呪縛に帰着し、その多くは現在でも影響を持ち続けている。だが恐らくその幾つかは既に呪縛から解き放たれ、別の定義を受け入れ始めている。まず、グノーシスについては、マルキオンがグノーシスの範疇に入るか否かを別にして、その影響がマルキオンに及んだことはほぼ間違いないであろう。哲学についてもまた同様である。近年の研究では、中期プラトニズムとマルキオンとの関係にも関心が持たれている。これはグノーシスと中期プラトニズムとの関係が深いことを受けてのことであろう。本稿ではこうした現在の状況を踏まえながら、マルキオンの思想がいかなる要素に関係するかを「創造」という切り口の下に考察してみたい。

「創造」というテーマが選択されるのは、始源に関わるテーマが救済などと並び、マルキオン思想の中心を占めていること、加えて私の個人的関心が神義論の方向に向いていることによる。資料として扱われるのはテルトゥリアヌス『マルキオン反駁』[3]である。この資料に限定して考察を行うのは、様々な古代文献から折衷してマルキオン像を造り出すことが研究者の関心に依存しがちなことを危惧してである。よって、本稿ではテルトゥリアヌスの資料に専念し、一、で創造の主体である創造者を扱い、二、において、その客体である世界と人間を扱う。三、では創造の際に媒介となった質料を取り上げ、続く四、で「創造」全体の考察を加えて結びとしたい。

一　創造の主体……創造者

他の多くの教父達が報告するのと同様に、テルトゥリアヌスもマルキオンが二人の神を説いていることを報告している。「このポントスの男は、あたかも自分の船が二つの岩礁に乗り上げ

たかの様に、二人の神を持ち出す。つまり（その存在を）否定できなかった創造者、これは我々の神であり、そして彼が証明できないであろう神、つまりマルキオンの神である」(1.2.1)。この創造者が我々の世界と人間を創造した神であり、この神は後にマルキオンの弟子アペレスが説く様な創造を行った天使としてではなくて、一人の神として捉えられている。「それでは創造主は決して神ではないのか。そんなことはない。明らかに神である」(1.13.2)。「神々の中の神が、神々の聖堂に立ち、その中央で他の神々を判決するだろう。そして、この私がこう言ったのだ。あなた方は神である、と。しかし、それでも彼らには至高の偉大さ(summus magnus)を所有する資格がない。何故なら彼らは神々と名付けられているに過ぎないのだから。同様に創造神も至高の偉大さを所有する資格がないのである」(1.7.1)。しかし、その神という称号にふさわしく、この創造神には以下の属性が付け加えられている。「さて、神であるというのなら、この両者は生まれず(innati)、創られず(infecti)、永遠である(aeterni)」(1.9.9)。この両者とは、マルキオンが説く二人の神を指している。従って、ここでは創造神は生み出されず、創り出されることもなく、永遠であるということが確認される。だがアーラント[5]が指摘する様に、この創造神には神性が欠如している。つまり非生成性、非被造性、永遠性は、後の章で扱う「質料」も属性として所有しており、ここでは質料が神として捉えられない理由と、創造神が神である他の理由が論じられるべきである。しかし、テルトゥリアヌスの資料ではこの議論が省略されていて、彼が報告するマルキオンの創造神は、その有限性、及び性格などから、むしろ人性が窺える。

論理的に十分な証明がなされた訳ではないが、テルトゥリアヌスが報告する限り、マルキオンは創造者が神であることを認めていた。この神とはいかなる性質を持つのだろうか。「この男は創造者が、『悪を創造したのは私である』と言っているのを見つけ出して、……こう解釈した。すなわち悪い木が悪い実を、つまり悪を生み出した。よって、良い実を結ぶ良い木は他の神に属さねばならない」(1.2.2)。まず、マルキオンは創造者自身が悪をこの世に生み出したことを確認している。この神が悪を生み出した理由や、「悪」[6]がここで具体的に指しているものについても考察はない。テルトゥリアヌスは自らの神義論をここで展開しているが、創造神の悪に関してはこれ以上踏み込んではいない。代わりに議論されるのはそのもう一つの性質である「義」である。「一方を良き神、もう一方を義の神と切り離して考えながら、おまえはどのような切り口で二人の神の相違をしつらえるというのか」(2.12.1)。「また同様に（おかしいのは）、おまえがその（創造）神を実際に義であると認めるのに、その神が裁きの際に用いる情動や感情をおまえが拒んでいることである」(2.16.2)。

マルキオンの考える創造神の特性として、義という概念は看過出来ないものである。何故なら、悪の創造者と善の神という

図式ならば、単純に善悪二元論へマルキオンの思想を組み込めるが、義の神と善の神という図式では、互いの原理が対立しないばかりか、両者の属性が重なる部分も存在してしまうからである。更に義に関連して、この創造神は以下の様に描写される。「彼はキリストの中にただ純粋な慈愛を見る。それはあたかも創造者のものとは全く対立するかのようである」(1.2.3)。「マルキオンは二人の神を仕立て上げた、一人は裁く者であり、凶暴で、戦闘能力がある。もう一人は穏和で寛大であり、あらゆる在り方において善性を持ち、最も良き者である」(1.6.1)。「……この神は、人間が罪を犯すまでは最初、ただ良き者であったが、それ以来裁く者であり、厳格で、マルキオン派がそう望んでいる様に残酷である」(2.11.1)。これらの特徴、すなわち戦争好きで、残忍で、罪を犯す者を裁くという性質は旧約聖書の中に表現されている神の行動を文字通りに解釈した結果と推測される。実際、マルキオンが旧約聖書を寓意的に解釈することを拒否していたことをテルトゥリアヌスは報告している。こうした反寓意的解釈は、創造神の有限性や無知をも指摘する。「そのようにしてまた、おまえは神の悔恨を歪曲して解釈する。あたかも神が動揺し、先見を無くし、過失を犯した記憶から後悔しているかの様に。というのも、確かに神はこう言ったからである。『サウロを王にしたことは(私を)後悔させることであった』。おまえは明確に後悔が、何かある悪しき行動や、間違いの承認を味わうことであると教示している」(2.24.1)。「神は大声でこう言われた。『アダムよ、おまえはどこにいるのか』。即ち彼が何処にいるのかを知らないかのように」(2.25.1)。

テルトゥリアヌスはマルキオンによるこれらの指摘に対して、神学的解釈を通して神を弁護する。例えば、アダムへの問い掛けは、犯した罪を自覚させるためであった[7]、などである。もっとも、これこそがマルキオンが取らなかった寓意的解釈であり、両者が平行線を辿るのは明白である。これらの報告から得られる創造神像は、悪を創りし者、義であり、感情的な者であり、先見性を欠く、無知な神というものである。

では、このように報告されるマルキオンの創造神像は、ある種の統一性を持つのだろうか。まず、悪の原理との関係を考察してみよう。ハルナックはこの創造神の悪がどのようなものか、七つの点を挙げている。「(a) 人間を不完全に創造したこと。(b) 多大な罰としての悪。(c) 異常な厳格さ、残酷さ、戦争好きで血を好む性質。(d)先祖の罪をその子供達にまで科すその在り方。(e)自分にたてつく人間に悪の中に縛り付ける事を科すこと。(f)最初の人間を命の木から遠ざけておこうと考える様な妬み。(g)悪人であっても、自分への崇拝者ならば、優遇する不公平さ[8]」。ハルナックに拠れば、これらは旧約聖書における神の「悪」の部分であり、「義」という性質とのみ折り合いがつくものである。但しこの義とは、形式的、偏狭的、応報的、かつ復讐的なものであり、そうした性質は、この創造主が専制君主と捉えられていることを示している[9]。だが、これは創造者

が悪の原理と捉えられていることを意味するのではない。アーラントの述べるとおり、ハルナックはここで、裁きにおける愛の欠如や、（全ての人間を救おうとしない）無能さの中に、人間に対する冷酷さをマルキオンが見ていたと考えている。[10]

マルキオンの創造神と真の神が、悪と善の二元論の関係でないことは、ハルナック以降の学者達の間でも、多く認められている点である。義と善は互いに対立する極性として捉えることは出来ないからである。実際テルトゥリアヌスの理解したマルキオンが二神を光と闇の対立とは認めていないことからも、創造神を悪の根源と見なすのは非常に困難である。しかし「質料」に関する項目で後述する様に、悪の神義論的な理由付けが、何らかの形で創造神に帰着するのも事実である。従って、ここではイラン型のグノーシスに見られる様な悪の絶対的原理を見いだせないことを確認するにとどめたい。

二　創造の客体……世界と人間

マルキオンはこの世界をどのように捉えていたのだろうか。テルトゥリアヌスは決して多くはないが、幾つかの点を報告している。「我々がその（マルキオンの）神をその（神としての）状態から駆逐する時、というのもこの神は創造という（神としての）証拠を前もって示したり、本来的な神に然るべきいかなる条件も持たないからだが、マルキオン派は極めて恥知らずにも鼻を高くしながら、この創造者の被造物を否定し始める。彼らはこう言う。確かにこの被造物は偉大だ。この世界も神に然るべきものだろう」(1.13.1-2)。話が完結していない感もあるが、この後マルキオン派がどのように世界を捉えているかについては述べられない。マルキオン派の世界観の代わりに、古代のギリシャ哲学者達、例えばタレースらが世界を水や火といったある種のエレメントから捉え、決してこの世界を軽視しなかったことがテルトゥリアヌスによって語られるのみである。「では、おまえは偉大なる巨匠（である神）が努めて本性と才能を高めたごく小さな小動物を嘲るのだから、……蜂が巣を作ったり、蟻が巣に入ったり、蜘蛛が罠を仕掛けたり、蚕が糸を出したりするのを出来るものなら真似をしてみるがいい」(1.14.1)。このテルトゥリアヌスの議論から推測できることは、マルキオンが創造者の創り出した小さな被造物を嘲っている、ということである。事実は確認できないが、マルキオンが何らかの形で被造物を過小評価していたことを、テルトゥリアヌスが批判していたのだろう。「おまえは空に敵対する。しかし、自分の家屋でおまえは空の自由さを熱心に追い求める。明らかにおまえの敵である肉体、その源と言える大地をおまえは軽蔑する。しかし、おまえはその大地のあらゆる精髄を生きるために抜き取っている。おまえは海を非難する。しかし、おまえが極めて清い食べ物と見なす生活の糧を（おまえはそこから得ている）」(1.14.4)。この記述から窺えることは、マルキオンのアンチ・コスモロ

ジーである。文字通りに受け止めれば、マルキオンが自分を取り巻くあらゆる環境に対して否定的であったことが推測される。ここでテルトゥリアヌスが批判しているのは、創造主の生み出した世界に養ってもらう立場にありながら、それに不平をもらすマルキオンの見解である。

こうしたアンチ・コスモロジーを、ハルナックは創造神解釈の延長と見なす[11]。つまり、無知で不完全な創造神の造り出した被造物を、なんら価値のあるものとは見なさないのである。この分析は恐らく妥当であろう。ヨナスもグノーシスに関する意見はハルナックと対立するが、マルキオンの世界観に関してはハルナックに見解を同じくする。「マルキオンはこの世界の状態を見て、創造主の特性を定義するのである。……マルキオンは単純に創造神と世界を同一視し、世界について言われたことを、そのまま創造神にも当てはめる。そしてマルキオンによると、創造神は最終的に一種の自己崩壊によって世界と共に滅びる。このことは結局、創造神が本当に神なのではなくて、この世界の霊でしかないことを示している[12]」。

テルトゥリアヌスが報告するマルキオンに拠れば、人間もまた創造神の被造物であり、所有物である。特にその肉体は、創造主の創りだした世界と同様、物質的に捉えられ、ネガティブに解釈される。「それならどうして、この(マルキオンの)神は、こんなにも辱められた肉体において、自分が現れることを押し進めたのか[13]」(1.11.8)。「明らかにおまえが敵対している肉体の、その源である大地をおまえは軽蔑している」(1.14.4)。まず、肉体に関する報告で注目すべきは、肉体に敵対する態度である。確かにこの敵対心はテルトゥリアヌスによる誇張とも考えられうる。肉体に敬意を払わないことを、上述の表現で誇張している可能性である。しかし、敵対(inimicus)という単語は、単なる不敬以上のものを指している様に思われる。「(マルキオンの神が不完全であることを示すには)以下のことだけで十分である。まず、その神は人々を救おうとするがそれは不完全であり、そのことはその神の善性の不完全さを示していることである。というのも、魂である限り救われるが、肉体は朽ちて、マルキオンに拠れば、それが復活することはないからである」(1.24.3)。続いてテルトゥリアヌスが報告しているのは、肉体への敵視や嫌悪ではなく、救済に関わるその位置づけである。興味深いのは魂が救済される一方で、人間の肉体は滅びてしまうという点である。この点は、東方系教父達の記述を除く他の多くの教父達、例えばエイレナイオスなどの記述と対応する。しかし彼らの記述との相違は、テルトゥリアヌスのみが魂の由来に関する記述を行っている点にある。

では魂とはどこからやってきたのか。他のあらゆるグノーシスの見解と異なり、マルキオンは創造者が魂を生み出したことを認める。「おまえはこう言う。創造者の根本的性質は、いかなる仕方にせよ、過失し得るものと見受けられる。というのも創造者の息吹、つまり魂が、人間性において罪を犯し、(創造者の

息吹という）退廃部分は、確かに至高の始原に戻り得ない事はないからである」（2.9.1）。「おまえはこう言う。（魂として形を持った息吹は本来よりも下位のものであるから）従って、おまえは今しがた否定した（人間の）弱さを魂に帰している」（2.9.7）。このテルトゥリアヌスの記述に拠れば、創造者の息吹が人間の魂そのものであり、このことによって人間の肉体から魂に至る全ての部分が創造者に由来することが決定的になる。同時に指摘されるべきは、マルキオンの説く神と人間とを結ぶ接点が、アントロポロギーの観点からは完全に消失してしまうことである。このことは旧約聖書の記述を、マルキオンが文字通りに受け止めたことを意味している。

肉体に関するマルキオンの見解は、彼独自のものとは見なされない。肉体に対する忌避や侮蔑的な感情など、その表現は多くのグノーシスの中に類似点が見られるからである。ビアンキはハルナックの研究の成果を多くの点で認めながらも、グノーシスに関わる見解に対しては、慎重に異議を唱えている。特にマルキオンの肉体や肉体を伴う誕生に対する軽蔑は、魂だけが救われるという救済観、キリストの仮現論と共に、グノーシスとの関係性を疑うことの出来ないものと位置づけている。[14]

しかし、魂が創造神の息吹であることは、グノーシスとの関係から考察すると、非常に特殊である。ヨナスは、ハルナックがマルキオンをグノーシスの範疇に入れなかったことを批判しながらも、この人間が肉体から魂に至るまで創造者の所有物であるということは、ある宗教もしくは思想家がグノーシスであるということの基本信条の一つを崩すものであると述べている。[15] ルドルフも二神論からマルキオンをグノーシスの範疇に組み込みながらも、この点についてはヨナスと同意見である。[16] この人間生成論は明確なグノーシスとの相違点であり、グノーシスの範疇に組み込まれるために（恐らく）不可欠な、真の神と人間との本質的関係性が欠如している。肉体だけが悪なのではなく、魂までもがこれに当てはまるということは、人間の完全な劣性、腐敗を意味しており、この点がパウロ主義的傾向であるとルドルフは指摘している。

この人間生成のアントロポロギーをグノーシスとの関係において更にラディカルに解釈したのがアーラントである。アーラントに拠れば、このマルキオンの説く魂の起源は単にグノーシスからの離反であるだけでなく、逆にアンチ・グノーシス的傾向を示しているという。何故ならこれは、グノーシスにおける人間（生成）に関する教えと救済に関する教えとの繋がりを破壊するものであると同時に、グノーシスに見られるこの世的なものと天のもの（真の神に属する領域）との混同を不合理と見なし、その混同の破壊さえ目論もうとしているからである。[17]

マルキオンのアントロポロギーがアンチ・グノーシスであるか否かの議論はここで決定され得ないが、テルトゥリアヌスの提供する資料の範囲内で推測するならば、マルキオンが人間と真の神との間に完全な断絶を見ていたのは確実であると考えら

れる。魂だけが真の神に由来するという事実を認識するグノーシスや、真の神から分離、派生したデミウルゴスが生み出した人間、といったモチーフはここには存在しない。従って、真の神と人間との繋がりは一切無いにも拘らず、真の神の慈悲が人間を救うという救済観が、マルキオン思想における核心の一つであったと考えられる。

三　創造に関係した質料

以下の記述で確認する様に、テルトゥリアヌスに拠れば、マルキオンは質料（materia）から創造神が世界を造り出したと述べている。この質料とはいかなる特性を持っているのだろうか。「被造物から、（キリストの神に善性が有る事の）証明は決定的である。創造神の被造物は以下の二つを証明する。つまり我々が示した様に、被造物が善であることから創造神の善性と、被造物がこんなに偉大で、確かに無から（創り出された）ということから創造神の力強さの二つである。しかし、もしもある質料から（世界が造られたと）彼らが望むとしても、この被造物自体は無から創られたのである」(2.5.3)。「そこでもしこの世界が、ある基礎となり、生み出されず、創られず、神と共時性を持つ質料から組み立てられたとしたら、これはマルキオンが創造者をそう見ているのだが、そうであればこの（我々のいる）場所の主人としてこの質料も加えるべきであろう。というのもこのことは、神と質料という二人の神を（この世界に）押し込めているからである。従って（マルキオンに拠れば）質料もまた、生み出されず、創られず、永遠であるという神性の形態に従って、神である」(1.15.4)。

テルトゥリアヌスはまず、創造神が質料から世界を創造したことを確認し、この質料の性質についても同時に報告している。マルキオンが捉えた質料とは、生み出されることなく、創り出されることもなく、創造神と永遠の始原から存在しているものであるという。そこでテルトゥリアヌスは、質料がそうした属性を持つならば、創造神と同じく、神もしくはこの世界の主人として扱われなければならないと論駁する。何故なら永遠という属性、生まれず、創り出されないにも拘らず存在するという特性は、神のみが持ちうるものとテルトゥリアヌスは考えるからである。更に質料に関する描写は以下の様に続く。「更にマルキオンは質料を悪と考えているのだから、（質料と悪の関係は）生み出されないものと生み出されないもの、創り出されないものと創り出されないもの、永遠なものと永遠なものとなり、この男は（悪を）第四の神に仕立て上げたのである」(1.15.5)。端的な描写だが、ここではマルキオンが質料に悪という属性を結び付けていることがわかる。ここでの悪とは如何なるものであるかについて、テルトゥリアヌスは何も記述をしていない。そして、このマルキオンの捉えた質料に関する描写もこれ以上語

られない。その代わりにテルトゥリアヌスはここでの質料がどこに由来するものかを報告している。「しかしマルキオンは自分の信仰の主要な用語がエピキュロス学派からのものであることを認めるべきである。彼は主を力無き状態にしながら、主を恐れないと言い、創造神と共に質料（という概念）をストア学派から使用している。彼（マルキオン）は肉体の復活を否定し、いかなる哲学もその肉体の復活に関しては同意をしない」（5.19.7）。ヒッポリュトスがエンペドクレスをマルキオンに結び付けた様に[18]、テルトゥリアヌスはエピキュロス学派やストア学派にマルキオンを結び付けようとしている。もっとも、ヒッポリュトスがエンペドクレスとマルキオンとの関係を詳細に述べたこととは対照的に、テルトゥリアヌスはストア学派などがどのようにマルキオンの質料観に結び付くかという点を語らない。

質料に関して重大なことは、マルキオンに拠れば創造が無からではなくて、既に存在していた質料から創られたということである。ここで質料はエズニクの報告するマルキオン神話とは異なって、一人の神としてではなくて、原理、つまりアルケーのようなものとして捉えられている。この点についてはハルナックが指摘している。「我々が判断できる限りで言えば、質料はマルキオンによって一度たりとも神として呼ばれたことは無く、また原理とも呼ばれたことはない。本当はそう呼ぶべきであったと思われるが」。そしてハルナックは、この質料からの創造というモチーフをケルドンから由来するものと結論づけている[19]。しかしケルドンとマルキオンとの師弟関係については既に疑問視されている。ある異端思想の由来を他のより古い異端者に結び付けるのは、教父達の常套手段であるとマイは述べる。ここでは教父達に従ってケルドンに結び付けるよりも、同時代のプラトニズムにこのマルキオンの質料観を帰するべきであるとマイは言う。マイに拠れば、同時代のプラトニズムは質料の中に悪の原因を見いだそうとする。これは一方で、マルキオンの思想とは異なる質料観である。何故なら（中期）プラトニズムは悪の原因を質料にしてしまうことによって、この世界に存在する悪に関わる神義論の問題を解こうとするのに対し、マルキオンは悪とされる質料からの世界創造を直接デミウルゴスの不完全さに結び付けようとするからである。そんな（良くもない）質料を使って創造を行った神が、真の神ではあり得ない、とマルキオンが考えたことは確かにあり得る。しかし他方で、質料に関する意味は異なったとしても、生み出されない質料、そしてそれを用いて創造神が創造を行うというモチーフは、マルキオンがプラトニズムから借用したものであるとマイは推測する[20]。ここでは表現が若干不鮮明であるが、簡潔に述べるならば、我々の世界にある悪は、（質料自体良いものではないが）質料そのものにその悪たる原因があるのではなく、その質料を用いた創造神にその原因があるとマイは解釈しているのである。実際、この視点は説得力がある。アーラントもこれと同様の解釈を行っている。「結局質料に関する事柄について、マルキオン

の観点はあまり明らかにはならない。確かなことは、マルキオンが質料を、創り出されることなく、永遠であり、かつ根源悪と見なしたことである。しかし質料の悪は直接ではなく、むしろ間接的にのみ効力の現れるものである。そして創造者を仲介させながら、『私が災いを創造する者である』という創造者の言葉をマルキオンは勝ち誇って引用する。……しかしマルキオンは少なくとも〈グノーシス〉とは独立して位置づけられないであろう。というのも原初は眠っていて、媒介的原理によって目覚め、活動を行い始める悪、というグノーシスの概念を、ここで見落とすわけにはいかないからである[21]。恐らく質料の悪としての役割は、マルキオンの思想において、それほど強調されてはいない部分であると考えられる。むしろ、創造神にその悪たる原因を見いだそうと試みられることから、質料が悪の最大の原因であるとはあまり考えにくい。

四　創造に関する考察

創造者、及び世界と人間に関する考察で、マルキオンのこれらの事柄に関する解釈は、旧約聖書解釈から導き出される可能性が示唆された。もちろんこれは、創造者の特性、そして世界や人間に関する性質の判断について当てはまることである。つまりその不完全性や、有限性が、旧約聖書の文字通りの解釈、つまり寓意的解釈を避けた結果から導き出されたものと考えられるのである。このことは、恐らく律法観に関しても当てはまるだろう。マルキオンの律法に対する価値観は、世界や人間に対するものと同様、創造神解釈の延長として捉えられる。しかし、同時に視野に入れておくべきは、これらの事柄が、グノーシスや中期プラトニズムなどの哲学からも導き出せる可能性が存在していることである。旧約聖書解釈によって、マルキオンの創造神、世界、人間のモチーフが全て説明可能であると結論づけるならば、恐らくそれは浅薄な考察になるだろう。例えばホフマンは、マルキオンの生地などの哲学的環境を考察した上で、マルキオンを保守的なパウロ主義者と位置づける。そして紀元後二世紀におけるマルキオン教会の、つまりマルキオンの弟子達の論争において、グノーシス的なモチーフを採用していく者が現れたと推測する。他方でマルキオン自身は、自らの思想の核心であるパウロ理解がグノーシス化することに対して、むしろ戦いを挑んだ者であるとホフマンは捉える[22]。確かにアペレスなどを想像すれば、弟子の中にグノーシスの流れに極端に向かう者がいたことはあり得るが、仮にマルキオンがいかに極端なパウロ主義者と捉えられたとしても、グノーシス的思考から逃れさせることは不可能であろう[23]。ルドルフが述べるように、パウロの極端な解釈、つまり律法と福音の対立から、二神論を導くことが出来ないことは十分考察されうるし[24]、上記で扱われた質料観がここから導き出されることもないであろう。実際、ハルナック後のマルキオン研究における共通認識は、マルキオ

ンがグノーシスの影響を受けたことは否定できないということである。ヨナスもアーラントも、無知で嫉妬深い創造神のイメージや、この世界からの救済、旧約聖書における義人達の価値転換など、グノーシスの影響なしにはその派生の説明が不可能であるが故に、マルキオンとグノーシスとの関係は切り離せないと捉えている。[25] しかし彼らの最大の相違点は、アーラントがそれでもマルキオンをグノーシスではないと結論したことである。それは既に見た様に、マルキオンが人間と真の神との繋がりを破壊し、グノーシスにおける救済の理由を消してしまったからである。[26] 他にも考慮すべき点はある。マイはアーラントと同じく、マルキオンとグノーシスとの関係が深いことについては是認しているものの、マルキオンにおいては二神同士の繋がりが完全にないこと、つまり二神間に如何なる上下関係も派生関係もなく、両者が完全に分離している点は、グノーシスと異なる点であると指摘している。[27] 恐らくこの相違点は、中期プラトニズムにも当てはまることであろう。

結び

以上の考察によって帰結される点は以下の通りである。まず創造神に関しては、あくまで神として捉えられていること、マルキオンの真の神とは、上下関係や派生関係など如何なる繋がりも不明なこと、そして創造神に結び付けられた特性は、旧約聖書解釈による可能性が高いことである。しかし同時に推測されるのは、二神的モチーフはグノーシスや他の哲学から導き出されたのではないかということである。世界及び人間の特性は、ともに創造神の特性の延長として捉えられている。最後に質料であるが、テルトゥリアヌスが報告する限りでは、永遠な者として捉えられ、一つの原理と同一視することも出来る。しかし神としては語られることはなく、いかなる神話も持たない。質料は悪いものと見なされるが、この世界に存在する悪はむしろ質料ではなく創造神に帰せられている。創造そのものが神話化されない点はマルキオン独自の世界観であるが、悪が創造神に結びつく点は、グノーシスに類似点が見いだされる。以上が本稿から導き出される帰結点である。

註

(1) Harnack, Adolf von, *Marcion*. Leipzig 1924.

(2) かの古代に起きた二元論的運動を「グノーシス」と呼ぶか「グノーシス主義」と呼ぶかは議論が分かれる点である。マルクシースに拠れば、メッシーナ会議の提案、即ち歴史的、類型的に分類されて、紀元後二世紀頃の特定グループなどを「グノーシス主義（Gnostizismus）」と呼び、時代を超えてエリートが占有する神的奥義の知識体系を「グノーシス（Gnosis）」と呼ぶという案は、大きな問題を孕む。と

いうのも古代の教父達は、我々が「グノーシス主義」と呼ぶ者を「グノーシス」と呼んでいたし、自らを「認識する者達」と呼ぶ一部のグループは、自分をさして「グノーシス主義者(Gnostizisten)」ではなく「グノーシス家(Gnostiker)」と呼んでいたため、研究の際に全てを変換するのでは混同が起きてしまうのである。例えばこの用法に則れば、フリーメーソンは「グノーシス家」と呼ばざるを得ない。むしろ古代のタームを優先させるのが自然というのがマルクシースの意見である(Markschies, C., *Die Gnosis*. München 2001, p.21-26.)。

(3) 本稿では三種類のラテン語原本が用いられる。まずクロイマンのラテン語のみの原本(Quintus Septimius Florens Tertullianus, Adversus Marcionem libri Quinqve, Aemilii Kroymann [ed.], in: Quinti Septimi Florentis Tertulliani Opera I, Corpvs scriptorvm ecclesiasticorvm latinorvm, vol.47, 1904, p.290-650)、二つ目にヒヴァンス校訂による原文と英訳(Tertullian Adversus Marcionem 1-5, E. Evams [ed.]. Oxford 1972.)、三つ目にはブローン校訂による原文と仏訳(Contre Marcion 1-4, R. Braun [ed.], Paris 1990-2001.)である。

(4) 本稿では「造る」と「創る」の用語を区別している。即ち、質料など何らかの材料を用いて行う創造を「造る」とし、無からの創造を「創る」とする。ここでの infecti は恐らく「創る」の方が妥当であろう。

(5) Aland, Barbara, Marcion, Versuch einer neuen Interpretation, in: ZThK, 70, 1973, S.428. しかしアーラントはどのような神性を議論にしているのかを述べていない。恐らくここでは救済や慈悲、無限の善性や愛のことであると考えられる。

(6) 実際、マルキオンが悪をどのように捉えていたかについては、このテルトゥリアヌスの著作から窺い知ることは出来ない。テルトゥリアヌス自身も、この問題については詳細に扱っていない(cf. Osborn, E., Tertullian as Philosopher and Roman. in: Die Weltlichkeit des Glaubens in der Alte Kirche, Berlin 1997, S.115.)。ロッテンヴェーラーは、マルキオンの悪に関する解釈を聖書的なものと捉え、戦争好きなことや気まぐれ、そして言動の矛盾など、創造神に結びつく点を付帯的な悪としてエイレナイオスから取り上げている。もちろんこれらはそのままテルトゥリアヌスの記述にも当てはまる(Rottenwöhrer, G., Unde Malum? Karlsruhe 1986, S.23-28.)。

(7) 『マルキオン反駁』第二巻第二五章第三節。

(8) Harnack 1924, S.100.

(9) Harnack 1924, S.97-101.

(10) Aland 1973, S.421.

(11) Harnack 1924, S.103.

(12) Jonas, Hans, *The Gnostic Religion*. 1963, 2nd., Boston 1991, p.141.

(13) ここでは、クロイヤン版及びフローン版がQuiで始まる平叙文、エピファニス版だけがQuidで始まる疑問文になっている。

(14) Bianchi, Ugo, *Marcion: Theologien Biblique ou Docteur Gnostique?* in: VigChr 21, Amsterdam 1967, p. 141ff.

(15) Jonas 1963, p.138.

(16) Rudolph, Kurt, *Die Gnosis*. Leipzig 1977, 3te Auflage, 1994, S.340-341.

(17) Aland 1973, S.434.

(18) Hippolytus, *Refututatio Omnium Haeresium. VII.29-31.*

(19) Harnack 1924, S.98-99.

(20) May,Gerhard, *Die Schöpfung aus dem Nichts*. AKG, 48, Berlin/N.Y. 1978, S.57-59.

(21) Aland 1973, S.428-429.

(22) Hoffman, J.R., *Marcion*. On the Restitution of Christianity, AAR.AS 46, Chico 1984, p.174-175.

(23) このホフマンの意見に対しては、マイが厳烈な批判を行っている。May, G., Ein neues Marcionbild?, in: ThR, 51, 1986, S.410.

(24) Rudolph 1977, S.340.

(25) Jonas 1963, p.137-138.; Aland 1973, S.431.

(26) Aland 1973, S.433.

(27) May, G., Marcions Genesisauslegung und die "Antithesen". in: Die Weltlichkeit des Glaubens in der Alte Kirche, Berlin 1997, S.189.